

特集

地域と連携した職場体験学習の取り組み

松原市立松原第三中学校

要約

二〇〇四年度、一〇回目という節目を迎えた職場体験学習（三中ハローワーク）。松原三中校区一一年間の学びと育ちの協働研究の中心的な課題であり、市教委や関係諸機関等の全市的な支援を受けて、同和教育実践を継承・発展させ進路学習の重要な学習として取り組まれてきた。学習の概要を振り返りながら、今後、中学生が「社会の中でどのように生き、自己実現をはたすのか」ということを中学生活をとおして考え、自己決定していく過程を支援する総合的な教育活動としての「キャリア教育」への発展の方向性を探る。

一 はじめに——三中ハローワークの特色

1 校区協働の取り組み

中学校校区には、義務教育を九年間のスパンで捉え、生徒指導と学習指導における双方向の連携を推進することにより、指導の一貫性や継続性および接続の円滑化を図り、系統的なカリキュラムの設定や効果的指導方法を

改善に努めることが、求められている。

非行と低学力の克服をはじめとする人権課題の解決をめざす一貫した教育を、教育課題として掲げてきた松原三中校区（布忍幼稚園・中央幼稚園、布忍小学校・中央小学校と第三中学校）では、地域連携を基本に、これまでの実践の歩みと情報教育等の新しい教育課題に果敢にチャレンジしてきた。今日的な特色を理解しあい、次のような協働の子ども像をめざして、校区あげて教育実践を展開してきた。

協働の子ども像

- ① 学ぶ力を自ら育み、自分と仲間の大切さを感じる子どもたち（学びと人権）
- ② 他者とつながり、地域が大好きな子どもたち（地域）
- ③ 夢を育み、未来にチャレンジできる子どもたち（夢・未来）

実践の主題は、「基本教科・人権・情報『学びの総合化』とヒューマンネットワークづくり」であり、研究実践の柱の一つが、人権学習の共通カリキュラムの創造である。

共通のカリキュラムの土台として、

- ① 「いのち、福祉、多文化共生、部落問題から自分の生き方づくりへ」
- ② 「くらし、労働、職業、進路から自分の夢づくりへ」に類型化し、これら二つをつなぐベクトルとして、
- ③ 「人間関係スキルの向上から自他を尊重する豊かな人間関係づくりへ」

が位置づけられている。

幼稚園から始まる「学びの一步」から、中学卒業までの「夢・未来と自己実現」を目標とする校区の共通カリキュラムの系統化を、「生活・総合的な学習・特別活動の時間と結んだ豊かな人権感覚を育む一一年間のデザイン

ン」と名づけている（資料1参照）。

三中の職場体験学習（以下、三中ハローワークと記述）はデザインの②の類型の中核的な取り組みであり、子どもにとっては、幼稚園からスタートした夢づくりの生活の中間総括であり、自分の夢と未来のための進路決定への第一歩として位置づいている。

2 全市的な支えのある取り組み

本校では、一〇年前から校区の事業所と三中校区地域教育協議会をはじめとする地域の各団体の協力を得て「三中ハローワーク」を実施し、地域のヒューマンネットワークづくりに向けての重要な取り組みとしてきた。

二〇〇〇年からは、松原市内の七中学校に取り組みが広がり、全市的な支援を受けた取り組みに発展している。

松原市教育委員会が、職場体験学習中、子どもたちの安全確保のための保険等を予算化し、体験学習を支援するための「職場体験学習懇談会」が組織されている。

職場体験学習懇談会は、松原市教委、松原市商工会議所、松原市商店会連合会、松原ロータリークラブ、松原ライオンズクラブ、松原中ロータリークラブ、松原ロータリークラブ、松原青年会議所、各中学校校区地域教育協議会からなり、年数回の会合を持ち、職場の確保や取り

組みの総括や課題の確認を行っている。懇談会では、市内七中学の職場体験での子どもたちの生き生きとした様子が報告され、学校と地域の諸団体の間で、次年度の課題を確認する貴重な場となっている。

3 同和教育実践を継承・発展した取り組み

三中ハローワークは、二年生前期の「総合的な学習の時間」を活用したのべ約三五時間かけた取り組みである。具体的には、一年三学期の事前学習を経て、二年の一学期七月上旬の二日間の職場体験を柱に、一〇月の事後学習を終える。本校の同和教育の実践である地域学習・地域のフィールドワークと自分史学習を関連づけた「親の労働に学ぶ」の実践を継承・発展させながら、手探りで毎年充実させてきた。

かつての松原市は、食肉・印材・金網・真珠核等の地場産業が隆盛であり、近郊農業も健在であり、子どもたちにとって「労働や仕事」は自分の身近に存在していた。そして、自分や仲間の生活を丁寧に見ることにより、働くことの尊さや素晴らしさを学び、労働を支える家族の存在に誇りを持ち、自らの将来や生き方を探求できた。

しかし、産業・経済の構造的な変化による地場産業の崩壊や家族労働の崩壊、雇用の流動化等の背景により、

子どもたちの将来への不安や不透明さを増幅し、「生きること」「働くこと」と疎遠になり、「親の労働に学ぶ」学習が十分に展開できなくなっていた。

そのとき、兵庫県ではじめられた「トライやるウィーク」に出会い、その方法論の一つである職場体験を取り入れ、「親の労働に学ぶ」の取り組みの継承として始めたのが、道徳・特別活動の時間を活用した初期の「三中ハローワーク」であった（今のようにならぬ）。五年前の状況を経て、現在のような地域あげての取り組みとなってきた。

この取り組みを通じて、働くことの尊さや素晴らしさ、支えてくれる家族や地域の人の思いなどを感じ取らせ、望ましい労働観の育成と将来への展望（夢・生き方）を持たせることを目標としている。

二 三中ハローワークの取り組み

1 職場体験学習に向けて―事前学習

(1) 「自分が興味のある職業調べ」(発表含め七時間程度)
「三中ハローワーク」の取り組みは、一年の三学期に行う「自分が興味のある職業調べ」からスタートする。

布忍・中央両小学校では総合的な学習の時間の一環で「職業体験」「地域の職業調べ」といった活動が行われ、地域で働く人たちの願いや思いを聞き取りや見学を通して学ぶ時間が設定されている。

本校では職場体験学習の導入として、自分の興味のある職業について書籍やインターネットなどを利用した調べ学習を行い、職場体験学習をはじめとする「進路学習・生き方学習」をこれから始める動機づけとしている。

(2)「身近な人の願いを知る」・「働くということ」(五時間程度)

その後春休みの宿題として、自分の身近な人(親、きょうだい、知り合いなど)から聞き取りを実施している(①仕事の内容(できるだけ具体的に)、②その仕事に就いた理由、③仕事での喜び・苦勞、④中学生に期待すること(その仕事をしていて大切だと思ふこと、中学生へ望むこと、願いなど)、⑤聞き取りをしての感想、の五項目からなる「身近な人への仕事調べ」の聞き取り用紙に記入させる)。

聞き取りでは、身近な人がどのような思いで働いているのか、働くことには辛いことだけでなく喜びがあること、そして今の自分たちにどのようなことを望んでいるのかを知り、どのような仕事であれ誇りを持って働く大人の意識を認識させ、その労働によって自分の生活が支

えられていること、家族を支えるために自分たちも将来働くことを認識させる。

この聞き取りの期間に家庭訪問などを行い、聞き取りのしにくい子ども、親の実態を特に学ばせておきたい子どもについて、しっかりと対応している。

聞き取りの結果は、クラスごとに新聞にまとめて意識の共有化を図るとともに(資料2)、これはという保護者を学校に招き、子どもの中で、直接職業選択の大切さやその仕事に対する誇りを話してもらって聞き取りをする機会を持っている。

2 職場体験学習—コース別学習・職場体験本番

(1)「プロの技に学ぶ」(四時間程度)

事前学習終了後、子どもが体験したい職種のアンケートを実施し、受け入れ可能な職場に振り分けたあと、八〇〇の職種で働く人たちの「プロの技」の素晴らしさとその仕事にかける意気込みを体験する「プロの技に学ぶ」という取り組みを実施している。

これは職場体験学習の受け入れ事業所の人や地域で専門的な技術を持つ人を学校に招き、働く人の持つ技術のすばらしさや仕事に対する厳しい姿勢を実際に目にする機会をもち、働くというイメージを深め職場体験学習に

資料2 クラス新聞

身近な人への仕事調べから

君たちは、1年生の総合「仕事調べ」を通して、たくさんの仕事があることを知りました。そして今回は、君たちの周りの人たちはどんな仕事に就き、どんな思いで仕事をしているのかをアンケートで調べました。それを新聞にまとめてみました。

「仕事について理由」「仕事の喜び」「仕事をする上でのつらさ」を新聞で読んで、仕事上の喜び・つらさを知っていきましょう。

その仕事に就いた理由

- ・小さい頃に幼稚園の先生にあこがれていた。高校で進路を考える時に幼稚園の先生になる学校を調べたら、内容が自分の興味のあるものだったので志望し短大に進学した。
- ・実習に行って、とても大変だけどやりがいのある仕事だと思った。
- ・商売が好きで、代々続いた家業を継いだ。頑張れば頑張るほど結果がでるから。
- ・今の会社の説明会に行って、創業者の話に感動しました。人と人との気持ちをつなぐ贈り物やお返し物を扱う仕事に興味を持ちました。会社も若く活気がありました。
- ・少子高齢化が進み、老人介護はこれから益々必要とされる仕事だから。
- ・学校卒業時に先生と相談して決めました。今までその会社に就職した先輩がほとんど辞めずに続いていることや、会社が近い等で決めました。
- ・手に職をつけたかったのと、接客の仕事がしたかった。

仕事での喜び

- ・お客さんが喜んで帰って、また来てくれること。
- ・冬は寒く、夏は非常に暑い現場の仕事は危険ですが、一つの物が完成した時が一番の喜びです。
- ・苦労した契約手続きが上手くいった時。お客様に商品をお届けできたとき。
- ・食事にも流行があり、それをキャッチし商品がメニューに入ったとき。
- ・ゴミの収集をしていて、市民の人に「ありがとう」「ご苦勞様」と言われたり、小さな子どもが手を振って「頑張ってる」と言ってくれたとき。
- ・夜中にトラックを運転するので、事故もなく目的地に着いたとき。
- ・喜びはたくさんの人と会うこと。患者さんの病気が治ったり、退院していくときに「いつもありがとう」と言ってくれたときはとてもうれしい。
- ・仕事が上手くいったときの達成感を味わう事が一番の喜び。また、自分の仕事の結果をお客様が喜んでくれた時もこの仕事について良かったと思える瞬間です。

人との関わりの中で、それを評価されたり、感謝されたりしたときであり、自分自身に納得のいく仕事ができるときですね。

仕事での苦勞

- ・仕事をもらうために他の会社と競争になる。
- ・仕入れた商品が売れ残らないように努力しなければならない。
- ・多々あるライバル店があるので業績が落ちないように頑張らなければならない。
- ・お客様からのクレーム。
- ・いやなことがあっても笑顔。
- ・けがをしても休めない。
- ・日々状況が変わるのでそれに対応していくのが大変。
- ・何百、何千という種類のラベルの印刷の中で、一つでも不都合があると、全ての印刷をやり直さなければならない。それには余計なお金や時間がかかり、何よりもお客に迷惑をかけることになり、謝りの電話を何度も入れなければならない。次の注文を受けるときに響くので神経を使う。
- ・電話での仕事なので、風邪をひいたり体調を崩すと声に出してしまうので自分の健康管理が必要。お仕事をされている方をお客様に持っているので、夜遅くまでかかる。
- ・することがたくさんあって、走り回らなければならない。
- ・利用する人は“死”というものを間近に感じながら生きておられます。昨日歩けたのに突然歩けなくなるというような、課題を毎日考え、仕事をしなければなりません。
- ・接客マナーの大切さ、物を販売することの難しさ、困難な修理、クレームの対応。
- ・事故がないように気をつける。
- ・衛生面での決めごとがとても厳しく、手洗い、アルコール消毒、調理、食器の洗いなども気をつかう。

・自分の子どもたちと一緒に過ごす時間が少なく、寂しい思いをさせる。

仕事がうまくいけばいいけど、毎日そんなことばかりではないですよ。だから、残業・徹夜など無理をしなければならなくなり、体がしんどいときも出てきます。ここでも人間関係がうまくいっているときはいいのですが、それがずれるときがづらいようですね。

○「仕事上での喜び・つらさ」のどちらも、人との関わりの中で生まれてくるということがわかりました。人とのつながりの大切さが伝わってくる意見でした。

中学生に期待すること

- ・一つの物をつくるのにたくさんのお金とたくさんのお人の努力などが関わっているからどんな物も粗末にしたらだめ。物を大事にする心をもってください。
- ・家族のため、子どもを大きくしていくために一生懸命仕事をしています。しんどい時や辛い時もあるけど、頑張っているということを知ってほしいです。途中で投げ出すのではなく、最後までやり通すこと。家族、仲間を大切に誰に対しても優しい気持ちを忘れずにがんばってほしいです。
- ・自分と他の人の役に立つことをしているという意識を持って何事にも取り組んでほしい。
- ・私は、仕事上、言葉でいろいろな事を伝えなくてはだめなので、言葉というものにごく気を使います。人の気持ちを考え、自分の意見もはっきり伝えられる人になってほしい。
- ・私は、夢は結局かなわなかったのですが、全力でその夢に向かって努力をしたという自信が持てず、「あの時、もっと頑張っていたら」と悔いが残っています。「仕事なんて何年も先のこと」と思わずに、自分の好きなこと、得意なことを早く見つけて夢に向かう意識というものを少しずつ持ってくれればと思います。
- ・大人になって仕事をするようになって、毎日が勉強の連続です。そして、何度も壁に当たってしまいます。しかし、頑張ったその壁を乗り越えれば大きな喜びとなり、気がつけば大きな力がついているのです。中学生の皆さんにも、たくさん乗り越えなければならぬ壁が出てきますが、がんばって乗り越えてください。きっと自分の力となり、強くなり、社会に出たときに役立つと思います。
- ・納得のいくまでがんばること。だめならやり直したらいい。人生も仕事も一生懸命のだから、色々な事にチャレンジすることだと思います。
- ・自分を知るために、勉強や色々なことを思いっきりやったり、本を読んだり、たくさんを経験してほしい。
- ・色々な情報や誘惑があふれていますが、本当に大切なことを見極めてほしい。
- ・仕事は、一人ではできません。取引先の人や会社と一緒に働く人のことをいつも考えておく必要があります。職場でも学校でも相手の立場に立って考えたり、行動するようにしてください。
- ・あいさつと思いやりと常識を持って行動してください。
- ・ハローワークでどんな仕事でも一生懸命生きてほしい。仕事を教えてもらうときに素直にきいてほしい。

対する関心を高めるものである。

本校の卒業生や地域の人をはじめ、保護者にも積極的にはたらきかけ、講師として登場してもらっている。

(2) 「スキル学習」(三時間程度)

従来は、子どもも受け入れ先の事業所紹介や講師紹介など職場体験学習の実施に向けての準備段階で、地域教育協議会等、地域の各団体に協力を得る形で取り組みを進めてきた。二〇〇四年度はさらに一歩踏み込んだ協力体制をつくることを意識して取り組みを行っている。

職場事前訪問や職場体験学習本番の前に、職種ごとに分かれて事前学習を行う「コース別学習」を実施している。二〇〇二年度からこの取り組みのなかに、職場での話し方や電話の応対、身だしなみなどを身につける「スキル学習」を取り入れた。二〇〇三年度からは「スキル学習」の内容をより効果のあるものとし、また地域の人とともに職場体験学習をつくり上げるという観点から、三中校区地

域教育協議会の役員の人々を講師に招き、子どもが事前学習で学んだことを実際に人前で行う「演習」の時間の指導をしてもらった。

当日は各コースに一人ずつ八名が、職場事前訪問の場面設定で、子ども一人ひとりに言葉遣い、姿勢、態度、身だしなみなど、様々な部分でコース担当教師と連携して助言・指導を行った。講師からは単にノウハウを指導してもらうだけでなく、社会人の先輩から子どもに大切にしてほしいことや職場体験学習にのぞむにあたっての心構えなど、多くの貴重な話をしてもらった。

多くの子どもが心もち緊張した顔つきで、事前訪問の時にどのように話を進めればよいか、真剣に取り組む姿が見られ、その後の事前訪問や職場体験学習本番に大いに役立った。

この取り組みは単に外部から講師を招き指導してもらうだけでなく、地域教育協議会の人々が中学校の授業のなかで自分たちの経験や考えを伝える場となり、それに真剣に応えようとする子どもの姿に触れてもらうことでも、大きな収穫のある取り組みとなった。

(3) 「職場事前訪問」・「事業所の人からの聞き取り」(六時間程度)

地域教育協議会の人からのマナー指導を受けて、子ども

もは職場体験の前に、当日体験する内容や心構えを事業所の人から直接聞き取り、体験学習のお願いに行く職場事前訪問を行う。子どもは当日の出勤時間や服装、昼食の有無、体験する作業内容などについて聞き、体験学習に向けての意気込みを決意文にまとめて事業所に渡してくる。

職場体験の前日には事業所の人を学校に招き、職場体験の厳しさと心構えについて聞き取りを行った。

こうして職場体験の本番前にピリツとした空気を持たせ、当日を迎えることになる。

(4) 「職場体験学習当日」(二日間実施)

本校では松原市内一〇〇カ所以上の事業所に分かれ、二日間の職場体験学習を実施している。一学年の生徒数が二〇〇名足らずなので、一事業所一〜四名程度の少人数での体験学習である。各事業所の前には「松原第三中学校職場体験中」という幟を立て、子どもたちが体験学習に参加していることが一目でわかるようにしている。

当日、子どもは事業所の人々と同じ時刻に「出勤」し、朝礼から退勤時間まで一緒に「勤務」する。

体験中は、本校の教職員だけでなく保護者も一緒に各事業所をまわり、体験の様子をデジタルカメラやビデオで記録するとともに、励ましの声をかけてくる。その後、

学年PTA新聞を作成し、記録した映像とともに保護者の感想なども掲載して、当日参加できなかった保護者とも体験の共有を図っている。

子どもは体験学習中に職場の人から仕事の喜びや辛さ、気をつけていることなど、いくつかのことを聞き取って帰宅後レポートを作成する。このレポートをもとに事後の発表会の原稿作りを進める。

事業所からも当日の子どもの活動の様子を評価して本人に示してもらおうとともに、後日学校へ提出してもらおう。学校・事業所・保護者（地域）相互で子どもの活動を評価する取り組みも行っている。

二日間の活動を終えて帰ってくる時の子どもの表情は、疲れたなかにも大きなことをやり遂げた充実感を顯わにしている、このあとの進路決定に向けても貴重な体験となっている。

3 職場体験を終えて―取り組みの情報化、発信

(1) 「ハローワーク発表会」(七時間程度)

職場体験学習後、取り組みを振り返り、子ども一人ひとりが得た貴重な体験を共有するために「ハローワーク発表会」を実施し、その際作成した壁新聞を掲示したり、本校のホームページにウェブページを掲載するなど、こ

の取り組みを、お世話になった事業所や地域に発信する取り組みを行ってきた(次頁に生徒作品の一部を掲載)。

本校でも昨年度から子ども一人ひとりにパワーポイントによるプレゼンテーションファイルを作成させた。見栄えのよいページが容易に作成でき、アニメーションや背景、吹き出しの挿入など、様々な効果を取り入れることができするため、一人ひとりの個性が表れ、子どもは非常に熱心にページ作成に取り組んだ。

また、この取り組みでは国語科の授業として文章の推敲や説明文、発表原稿の作成の指導を行い、技術科の授業のなかで事前にパワーポイントの操作の指導を行うなど、教科指導と内容をリンクさせ、さらに市教委からIT技術指導員に来てもらい、技術的な指導援助をうける体制を取ったことも成果につながっている。

(2) 事業所事後訪問(一時間程度)

職場体験の翌週には、体験した職場を再度訪問し、体験のお礼を述べるとともに、学校で作成した感謝状を持って行き、各事業所に飾ってもらっている。この感謝状の作成についても、二〇〇四年度から写真を銀塩写真からすべてデジタルカメラによるものに替え、忙しい学期末に作業を早く終え、作業の効率化を図るとともに生徒作品にも容易に活用できるものにした。

体験記

～やりきれたこと、できなかったこと、成功したこと、失敗したこと～

- ※ やりきれたことは、店内にあった草や葉を片付けきった事と、初めてしたフラワーアレンジが、とても綺麗に出来上がった事です。
- ※ 出来なかったことと、失敗したことは、初めてする事に戸惑って、作業が遅くなってしまった事と、何本か花や草をちぎるのに、失敗してしまった事です。



教えてもらったこと(アドバイス)

何を売るにしても、商売をするなら、お客さんや商品に対して、誠実さを示すことが大切だとおっしゃってられました。

ハローワークでつかったこと

- ※ たったこれだけの仕事しただけで、くたくたになってしまいました。
- ※ いつも仕事をしている両親は、もっと大変な仕事をしているだろうし、今回行かせていただいた西尾さんも、毎日のように手が真っ黒になるまでやっていて、本当に「仕事をする」ということが大変なんだと、改めて実感出来ました。
- ※ 仕事をしていて、辛いこともあるけれど、楽しいことや嬉しいことがあり、そして何よりも、「人の役に立っている」と言うことを大切に思うことを、教えて頂きました。



(地域協主催、四〇〇〇人規模。略称「ヒューマンフェスタ」)のなかで発表ブースを設け、協力事業所の紹介と子どもが作成したプレゼンテーションを発表した。多くの人に発表ブースの見学に来てもらい、地域の人々にも職場体験学習の取り組みや子どもの様子を理解してもらうことができた。

三中ハローワークの取り組みは、子どもが地域の人々と出会う機会を増やし、自らの将来や生き方をより深く考えさせ、人とのネットワークづくりを進めるだけでなく、学校・地域・家庭の三者の連携や相互理解をさらに進め、「開かれた学校づくり」の一端を担う取り組みへと発展し続けている。

四 まとめにかえて—三中ハローワーク以降の学習

一一月の「ヒューマンフェスタ」をまとめの場として、三中ハローワークの取り組みは終了する。

事後指導における資料のデジタル化により仕事が効率化できるだけでなく、より広範に資料が活用でき、情報発信という点においても優れた点があった。事後訪問の後、事業所との関係がさらに深まり、三年生になってもたびたび訪問する子どもも多い。

(3) 「三中校区ヒューマンタウンフェスティバル」での発表

取り組みを三中校区に広く発信するために、一一月に行われる「三中校区ヒューマンタウンフェスティバル」

資料1の「一一年間のデザイン」表にあるように、「くらし、労働、職業、進路から自分の夢づくりへ」の学習は、修学旅行後の「高校授業体験(中・高トライアルス

タデイ」と「保育実習」に引き継がれる。この二つの総合学習の取り組みについてふれ、まとめにしたい。

二年間、ふくらませてきた自分の夢の実現に向けて進路選択をスムーズにするために、高校出前授業を柱にして、地元の公立高校や私立高校の協力を得て実施しているのが「高校授業体験」である。

この取り組みは、以下の二つのねらいを持っている。
①夏期休業中、各高校が主催する体験授業に全三年生が参加できるようなオリエンテーションとして取り組む。

②学力や生活に課題をかかえた学級の仲間とともに、全員が高校をめざしてがんばる契機とする。

近年、公・私を問わずほとんどの高校で、夏期休業中や九月上旬に高校授業体験が実施されている。単に授業内容を紹介するだけでは、体験する子どもは十数校も体験し、しない子どもは「全くしない」という現象が起きてしまう。特に、学力や生活に課題をかかえた生徒は、無指導であれば「全く」になることが多かった。そのような状況を乗り越え、みんなが夢の実現のために高等学校の特色・授業内容・卒業生の進路状況を調べ、その後、授業を全員に体験させようとする取り組みである。

「保育実習」は、三年生の一〇〜一一月の総合学習として取り組んでいる。

この取り組みは、自分たちが育ってきた保育所・幼稚園に帰り、乳幼児と一日生活する「体験」を柱にしている。本校の生徒の多くは、市内の四保育所（公立三、私立一）と中央・布忍幼稚園で「学びと育ちの一步」をスタートさせている。六つの保育所・幼稚園に協力を得て、自分史の振り返りと保育内容の「事前学習」、遊具の工夫・作成等の「準備」、乳幼児との遊び等中心の「交流」、体験を卒業文集にまとめることが、その具体的な取り組み内容である。

ベテランの保育士から「〇〇さん、大きくなったネ」と声をかけられた子どもたちの表情は、穏和であり、乳幼児と遊ぶやんちゃな子どもたちの表情も優しい。そんな場面が多く見られる取り組みである。

三年生の一一月という、進路選択を巡り子どもが最も揺れる時期に、乳幼児と交流することに大きな意義があると捉えている。進路選択は高校選びではなく、夢や生き方の選択であり、一五年間生きてきた人生の中間総括でもある。「保育実習」での自分史の振り返りと乳幼児との自然な交流を通じて、どのように自分の生命が誕生し、保護者や地域のいろいろな大人に育まれてきたかを再確認し、夢や生き方の選択としての高校選択につなげようとのねらいを持っている。

二〇〇一年度から、本校では、一年の「中学生での夢」(夢を綴る中学校最初の自分史学習)から、二年生の「三中ハローワーク」、そして三年生の「中・高トライアルスタディ」「保育実習」へとつながる「くらし、労働、職業、進路から自分の夢づくりへ」をテーマにした進路学習を展開してきた。

その最初の学年が二〇〇四年度卒業していった(卒業生一八一名中、就職三名、公立・専門学科五一名普通科八四名、私立高校四四名)。その子どもたちに対して本校の取り組みがどこまで有効であったか、今後を見守っていきながら取り組みの充実に努めていきたい。